

# 子どもの言語発達に関する研究

## —身振りと言彙理解・語彙表出との関連性について—

星 山 由 布

### 1. はじめに

相手に状況や場面を説明しようとするとき、身振りは無意識に自然に表出する。たとえば、誰かに道を案内するとき、「すぐそこの角を右に曲がって」とことばで説明しながら、腕を伸ばして人差し指を右方向に向け、曲がる動作を表現したりする。相手が実際に目の前にいない電話でのコミュニケーションにおいても、同様のことがおこりうる。このような身振りを誰もが日常無意識に、そして頻繁に使うように、身振りは私たちのコミュニケーションにおいて、ことばの生産とその理解に深く関係しているのである。このようにコミュニケーションの場において、身振りと言語活動は密接な関係を持つということから、乳児や幼児の言語発達には身振りが密接に関係していると言われている。そこで、本研究では乳児や幼児の身振りと言語発達について、身振りは後の言語発達において重要な役割を持っているという仮説をたてる。そして、保育園で自身が録画したビデオ記録の観察に基づく考察を行い、仮説を検証したい。

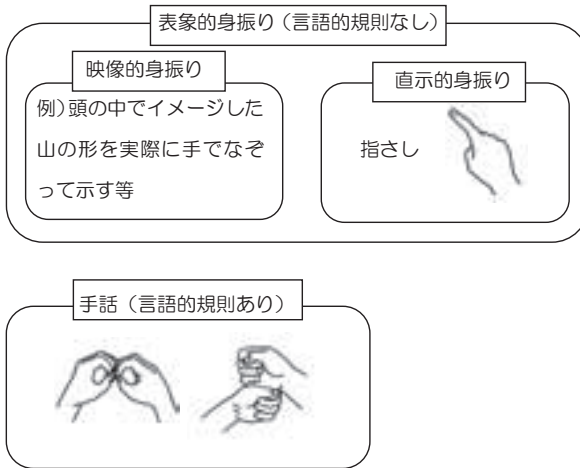
### 2. 身振りとことば

#### 2.1. 身振りとは

身振りとは、対象を操作するためになされる直接的な実践活動ではなく、非実践的な身体・姿勢活動である。さらに身振りは人に向けられている必要がある。つまり、他者に向けた意図的で随意的なしぐさを身振りという（麻生1992）。

また、一言に身振りと言ってもその種類には実にさまざまな種類が存在する。ここでは、本研究で主に言及する「映像的身振り」(iconic gesture)、「直示的身振り」(deictic gesture)の二つについて簡単に説明する。まず「映像的身振り」(iconic gesture)とは、身体の動きと対象となる事物や出来事の間に類似性がある身振りをいう。例えば、頭の中でイメージした風景の中に山があったとき、その風景を説明するために山の形を手でなぞって示したりする。これが「映像的身振り」(iconic gesture)にあたる。次に「直示

図1 表象的身振りと手話



的身振り」(deictic gesture)とは、身体の動きがある方向や場所を指し示す身振りをいう。人差し指を突き出して事物を指し示す「指さし」は、この直示的身振り(deictic gesture)に位置づけられる。この映像的身振りと直示的身振りをまとめて「表象的身振り」と呼ぶこともある(小林・佐々木2008)(McNeill 1992)。

コミュニケーションの場面において、手の形や動きによる伝達手段であるという点で表象的身振りと手話は共通する部分がある。しかし、図1のように身振りと手話との間には言語的規則を有するかそうでないのかという大きな差異が存在する。

映像的身振りは対象の事物との類似性を表し、直示的身振りは空間的方向性に基づいた相互理解を促す(小林・佐々木 2008)。そのため、身振りは個人的な表現でありながらも、用いることで、言語体系に縛られずにある程度自由に考えや思いを表現し相手に伝えることができ、この自由度が言語発達の未熟な子どもたちのコミュニケーションに重要な役割を果たしているのである。

## 2.2. 子どもの言語発達と身振りの発現

子どもの言語発達の過程の中で身振りがどのように発現し変化していくのか、またその二つの間にはどのような結びつきがあるのかを順を追って見ていく。まず、生まれてすぐの赤ちゃんははじめ泣き声しか発しない。しかし、生後6～8週間ごろになると、泣き声とは違った、甘えるような声を発するようになる。これを一般に「クーイング」

(cooing) という。たとえば「クー」とか「アー」というような声である。その後、生後6～8ヶ月になると喃語といって母語の音素を多く含んだ音節からなる音声を発するようになる。喃語自体に意味はなく、最初は「あーあーあー」というように単純な音節の繰り返しを発し、次第に9ヶ月ごろになると母語の音韻体系に沿った喃語を発する。前者を「過渡期の喃語」(marginal babbling)、後者を「規準喃語」(canonical babbling)という(正高2004)。この時点ではまだ音声と意味が結びついてはいない。しかし、その後一語発話期に入ると「まんま」「わんわん」のように音と意味が結びついた単語を発するようになる。そして、二語発話期に入ると「まんま、たべたい」というに簡単な文が作れるようになる。

赤ちゃんがクーイングや喃語を発する時期によく観察してみると、手や足の動きがクーイングや喃語とほぼ同時に起こっている点に気づく。その動きにはリズムがあり、正高(2004)によれば、次第に足の動きよりも手の動きの方が増え、過渡期の喃語を発するころには手を振ったり、持っているものを床や机に叩きつけたりしながら発声するようになる。さらに、基準喃語の時期になると手の動きはだんだんと観察できなくなっていく。つまり、初期のコミュニケーション行動は音声と手や足の動きが互いに混ざり合って現れるのである(正高2004)。さらに、音声と身振りが深く関係していることは、音声言語を使う人が無意識にたとえば電話口などで身振りをしてしまうことから推測できる。また、Goldin-Meadow(2005)によれば言語にさらされている環境にあるにも関わらず、言語習得に問題が生じてしまった子どもに、ジェスチャーを使わせたところ、問題のない言語の発達を促すことができたという例もある。

そして、1歳半以前の子どもを観察するとその身振りは大きく2つに分けることができる。一つは、前述の通り身体の動きがある方向また場所を指し示す「直示的身振り」(主に指さし)である。そしてもう一つは、身体の動きそのものが何か別のものを表現する「象徴的身振り」(symbolic gesture)である。象徴的身振りは体の動きと対象となる事物や出来事の間に類似性があるという点で「映像的身振り」に似ているといえる(小林・佐々木2008)。指示対象がはっきりした意図的な身振りが現れるのは生後10カ月前後からであり、その中で最も使用頻度が高くなるのが「指さし」(pointing)である。しかし、一口に「指さし」と言ってもそこに至るまでには様々な発達が合流する必要がある。

### 2.3. 指さしと視線

言語習得において指さしと視線は非常に重要なものであるということはさまざまな研究からすでに明らかになっている。特に子どもがものの名前を覚えはじめる段階において指さしと視線は重要な役割を担っているのである。指さしは、自分以外の誰か、自分と誰か別の人が、指の先にある同一のものを見るためのものである。そして、誰かが何かを指さすことによって、その周囲にいた人間がそのものに注意を向け、指さした人と対象物に関して認識を共有するのである。指先から伸びた、見えない延長線上をたどりはじめ、そして他者の指さしに理解が及んだとき、ことばの習得が急速に進展するのである(正高2004)。大人が人さし指それ自体ではなく、その先にあるものを指しているのだということを子どもが理解するとき、子どもと大人と指示対象の「三項関係」が形成される(正高2004)。大人がことばを話し、相手とコミュニケーションをとることができるのも、この「三項関係」が形成され、そのことばが何を指すのか互いの意識の中で共通の認識があるためである。あるものを指さすことで、同じ認識を共有するという点ではことばと指さしは似たものであるといえる。

正高(2004)によれば、この指さしは人間の身振りによるコミュニケーションの中で最も高度な行動の一つであるという。その理由は、ヒトをその他の生物から分かつ特徴の一つが自分の身のまわりにあるさまざまな事物の存在を他者に伝達しうることにあるからである。この高度なコミュニケーション行動の源を辿っていくと、指さしがそもそもある対象物をつかもうとする行動から始まったのではなく、はじめからコミュニケーションをとるために発達していったことがわかる。その証拠に、子どもが手の届くものを指さすとき、わざわざ数歩うしろにさがってから指さしするという行動が観察されている。ところで、このような対象がはっきりした指さしをし始める前にまず赤ちゃんは指たてという身振りをする。この指たてという行動は、特に対象物を示すわけではなく、人差し指を立てるだけで生後3ヶ月頃に見られる身振りで手によるクレーイングと言われることもある。この指たては、指さしが出現する1歳頃までよく見られるが、そのあと指さしの増加とともに減っていき、いつしか指さしに取って代わられる。大人がこの赤ちゃんの指たてに気づいて声で反応すると、徐々にその頻度が高くなり、非言語的音声と言語的音声とでは後者と共起することが圧倒的に多いということがわかっている(正高2004)。

したがって、指たてという行動は赤ちゃんのコミュニケーション手段であるといえる。  
2.2.でも触れたように、この行動も音声と手や足の動きが互いに混ざり合って現れ、同

時進行で発達していくことの一環となっている。

#### 2.4. 指さしの発達から発話までのプロセス

指さしは、生後10ヶ月前後から現れる指示対象のはっきりした意図的な身振りであり、最も使用頻度が高い身振りである（小林・佐々木2008）。そして、指さしは様々な発達が合流した結果出現するため、それは新たな機能を持った行動を生み出す瞬間である。ここでは、指さしの発達から発話までにはどのようなプロセスがあるのか、その流れをビデオ観察と文献を用いて考察する。

##### ビデオ観察1（撮影日2008年8月）

生後6ヶ月のCちゃんは保育士に抱っこされながら天井から吊るされているおもちゃに手を伸ばして遊んでいる。その間、保育士の顔をちらちらと見ながら揺らしたり引っ張ったりしている。おもちゃから手が離れた瞬間に保育士が場所を移動すると、Cちゃんはおもちゃの方へ手を伸ばし、「アー、ウー」と声を発しながら身を乗り出している。

ビデオ観察1でみられるこの行動は、「対象に触れる」ことを志向しているのであって「要求対象を他者に指し示す」ためではない。麻生（1992）によればこれは通常の身振りと形式が同じでも機能のはっきりしない「原身振り」という行動で、大人が解釈可能な直示的身振りや象徴的身振りに1ヶ月から2ヶ月先行して現れる。しかし、保育士がCちゃんの行動に対し「あっちに行きたいの？」や「あのおもちゃがほしいの？」などに対応していたことから、大人がその行動に意味を付与して接することで子どもが形式と機能の安定した対応という記号の成立を理解するのを手助けしているのではないかと考えられる。

##### ビデオ観察2（撮影日2008年8月）

生後9ヶ月の園児は、椅子に座って食事の配膳を待っている。食事中まだ配膳されていないフルーツに手を伸ばして声を発している。そのフルーツは手の届かないところに置かれており、その間の視線はフルーツと保育士とを交互に移動している。

指さしに合流する次の発達はビデオ観察2に見られるようなからだの一部をある方向

に伸ばして、方向に関する意図を他者に伝えるようとする行動である。これは「手さし」と呼ばれ指さしに先行して現れる行動である（麻生1992）。「あれが欲しい」や「あっちに行きたい」と手さしを使って大人を操作するようになる。その後指さしが現れる。しばらくの間この二つは共存し、手さしは主に大人を自分の要求通りに動かすのに使われ、指さしはものを指し示すのに使われる。

### ビデオ観察 3（撮影日2008年 8 月）

生後13ヶ月のMちゃんはある一冊の絵本を指さしながら保育士の方を見ている。保育士が「なあに？」と声をかけると、絵本を持ってきて膝の上に座り読んでもらうのを待っている。絵本を読み始めると、今度は動物のイラストを指さしながら振り返って保育士の顔を見て、保育士が「ニャンニャン」というようにその動物の名称を言うと、また別のイラストを指さして同じようなことをする。この時点での指さしと発話の共起は観察できない。

### ビデオ観察 4（撮影日2008年 8 月）

1歳8ヶ月のKくんは保育士が紙芝居を指さししながら読み聞かせているのを保育士と同じように指さしをしながら見ていた。その紙芝居は今まで一度も読んだことのないものであった。その二日後、保育室の壁にその紙芝居と同じ絵が描かれた紙を指さしながら「あおむし、あおむし」とイラストの名称を保育士に教えるよう発話した。

### ビデオ観察 5（撮影日2008年 8 月）

2歳2ヶ月のYくんは地面にいたセミを見つけて、近くにいた保育士に「これなに？」と指さしをしながら何度もきいていた。そのつど保育士がゆっくり「セミ」と言うと、今度は「セミいた。セミいた。」と何度も言っていた。

指さしが現れてからはビデオ観察 3, 4, 5 から分かるように、発話なしの指さしから発話ありの指さしという順序があることがわかる。つまり、その対象物に対応する単語がわからない場合はまず指さしを用いて示し、対応する単語を学習したあとは単語を

言いながら指し示すのである。この一連のプロセスはアイバーソンとゴールドデン＝メドウ (Iverson & Goldin-Meadow 2005) による10ヶ月から24ヶ月の間の縦断研究でも同じことが言われており、指さしだけのコミュニケーションが単語の獲得への準備段階であることを示す研究結果が出ている。そして、この研究ではその後単語が指さしにとって代わると述べられている。すなわち指さしによってその対象物に対応する単語を得るのである。よって、指さしが語彙の獲得に重要な役割を担っていると言えるだろう。また、ビデオ観察3で挙げた1歳8ヶ月のKくんと同じクラスの子どもたちを比較すると、指さしの頻度が多い子ほど発語が多い（語彙数も多い）という正比例の関係があることが観察できた。このことはベイツらによる9ヶ月から13ヶ月の子どもの縦断研究でも明らかにされており、この時期の指さしは、子どもが言語発達への第一歩を踏み出していることを示唆するとしている（小林・佐々木 2008）。また、表象的身振りも直示的身振り（指さし）と同じように、身振りだけ→身振りと言語が同期→発語だけというプロセスがある。自分の要求を示すときや仲直りの気持ちを表したりするときなどによく見られ、たとえば友達同士で遊んでいる場面では、その場所を譲ってほしいときやおもちゃを貸してほしいときに現れる。最初は身振りだけでそのことを表すが、要求が通らないと保育士を呼んで訴え、そうして保育士はこの場合は何とさえいえるのか子どもに教える。たとえば、「ちょうだい」や「どいて」、「かして」などである。表象的身振りに関して喜多（2002）は、語彙の量と象徴的身振りの数の間に相関が見られることから、初期の語彙獲得と象徴的身振りの発達は、どちらも親と共有可能な記号を蓄積していくという能力の現れであると述べている。

続く表1（次頁）は、ここまで見てきた子どもの言語の発達と身振りの発達について、音声から初語、指示語の使用、語彙の増加、文法の出現という言語発達の区切りと指さしに至るまでの身振りの発達とその出現時期との対応関係を表したものである。加えて、その時期に達成することができる認知課題（小椋1999）を示した。

生後9～10ヶ月は初語の出現と同時に意図的コミュニケーションができるようになる時期である。喃語に意味が与えられ、意図を伝える手段としての使用が始まる。認知面では事物間の関係を認識し、定位活動をする時期である。身振りについては、大人を操作するようになり、自分－対象物－大人という事物間の関係を把握していることがわかる。生後12ヶ月前後の各項目の発達についても目的達成のための道具の使用、その場合に必要となる指示語、そしてその指示語と共起する指さしというように言語、認知、身振りの発達は共に関連していると言える。このように、ことばの発達と認知の発達の両

表 1 言語と認知及び身振りの発達

年齢	言語	認知（感覚運動技能）	身振りの出現と変化 （ビデオ観察）
		ビデオ観察 ----- 認知課題（小椋 1999）	
生後 6～8 週間	クーイング	指や新しい物をしゃぶる ----- 反射の行使	クーイングと手足の動きの共起  生後 3 ヶ月～ <u>指だて出現</u>
生後 6～8 ヶ月	過渡期の喃語	紐を引くと音が出るのに気付 き、何度も引く ----- 視覚と把握の協応	<u>手さし出現</u>  喃語と手足の動きの共起  （ビデオ観察 1）  対象物へ手を伸ばす  身振りと音声の共起あり
生後 9～10 ヶ月	意図的コミュニケーション  規準喃語  初語	隠されている物を取るために 障害物をどける ----- 事物間の関係認知  方向性のある定位活動	手さし継続  <u>指さし出現</u>  （ビデオ観察 2）  身振りを使って自分の思う通り に大人を操作する
生後 12 ヶ月前後	指示語	台を使って届かない物をとる ----- 目的達成のための道具（事 物・人）の使用、記憶（包み 込む）（手段－目的・因果性・ 事物の永続性 V 段階）	指さし継続  （ビデオ観察 3）  絵本を持って保育士の元へ行 き、絵本のイラストを指さす  指さしと発話の共起がある場合 とない場合あり
生後 14～16 ヶ月	語彙の増加	ブロックを人に見立てて遊ぶ ----- 全体一部分の関係認知	指さし継続  （ビデオ観察 4）  紙芝居を見た数日後に同じ絵を 見て指さす  指さしと発話の共起あり
生後 19～24 ヶ月	文法の出現	ふり遊びをする ----- 図形弁別、認知の分化、予見	指さし徐々に減少傾向

（ビデオ撮影日 2008 年 8 月～2009 年 12 月）



方に影響を受けながら、身振りは自分の中の考えや思いを他者へと伝えるための支えとして発達していくのではないかと考えられる。

### 3. 調査研究

#### 3.1. 調査目的

第2章では身振りとことばの関係を子どもの言語発達とその身振り、特に指さしの発達に注目して見てきた。ここでは、子どもの言語発達と身振りの発達について、より詳しく捉えるためには縦断観察からの資料が必要であるとの考えから、14児を1歳児クラスから3歳児クラスになるまで観察し、身振りと語彙理解、語彙表出の関係を明らかにする。また、観察するにあたり、身振りの発現、特に指さしが多い子ほど語彙の習得も高いという仮説を設定した。

#### 3.2. 調査方法

##### データ収集

市内の公立保育園園児14名（男児9名・女児5名）を対象者とし、1歳児クラスから3歳児クラスになるまでを観察した。観察期間は、2008年8月から2010年11月である。実際に観察できた身振りを保存するため、ビデオカメラを用いて記録した。また、対象者に関する情報（月齢・指さしランク・語彙ランク・性別・兄弟姉妹・入園時の年齢・祖父母の同居・保育時間・登園日数）の収集にはアンケートを用いた。アンケートの項目は表3の通りである。さらに、1歳時、2歳時、3歳時に渡って「身振り」、「語彙理解」、「語彙表出」の3項目のアンケートを担当の保育士の方に回答してもらった。

##### 分析方法

対象者に関する情報のアンケートは項目をすべて数値化し、統計的に処理した。「身振り」、「語彙理解」、「語彙表出」の3項目のアンケートは、すべての項目を3点、2点、1点、0点で処理した。身振りは「よくする」を3点、「する」を2点、「たまにする」を1点、「ほとんどしない」を0点と処理した。語彙理解は「よく理解する」を3点、「理解する」を2点、「あまり理解しない」を1点、「理解しない」を0点とした。語彙表出は「多い」を3点、「ふつう」を2点、「少ない」を1点、「ない」を0点とした。

## 4. 調査結果

対象者の情報に関するアンケート項目について相関係数の算出を行った。また、1歳、2歳、3歳時に身振り、語彙理解、語彙表出について行ったアンケートをクロス表と折れ線グラフにし分析した。ここでは、注目すべき結果をとりあげる。

### 4.1. 指さしランクと語彙ランクの相関

対象者の情報に関するアンケートから得られた指さしランクと語彙ランクの相関係数を算出した。その結果、指さしランクと語彙ランクには0.296と弱い相関があるが有意差は認められなかった。しかし、指さしのランク付けを行った時点ですでにある程度話ができる子は、指さしに頼らなくても意思疎通が可能なため、ランクが低くなっている。なお、Rの値が0.3に近くなればなるほど2変数指さしランクと語彙ランクの間に相関があることを示す。

### 4.2. 男女別に見た指さしランクと語彙ランク

男女別に見た指さしランクと語彙ランク及び月齢の母平均値の差の検定結果では、指さしランクは男児より女児の方が平均値が1.857と高いが、有意差は認められなかった。しかし、語彙ランクは男児より女児の方が2.571と高く、有意差が認められた。この男児と女児の違いがそれぞれの月齢による差かどうかを確かめるために、検定を行ったところ、男児は32.273、女児は34.143となり、男児と女児の月齢の有意差は認められなかった。

### 4.3. 1歳から3歳までの身振りと言彙理解、語彙表出

#### 4.3.1. 身振りと言彙理解、語彙表出のクロス表結果

「身振り」、「語彙理解」、「語彙表出」の3項目のアンケートの結果を、①身振りと言彙理解、②身振りと言彙表出、③語彙理解と言彙表出の組合せにし、得点別にそれぞれクロス表にした結果、各表の2歳の時にある特徴があった。それは、2項目のうち一方の点数が高ければ、もう一方の点数も高くなり、反対に一方の点数が低ければもう一方の点数も低くなるという特徴である。また、①②③も3歳になるとほとんどの子どもが2項目とも高い点数となり差が見られなくなる。

4.3.2. 4 タイプの身振りと言彙理解、語彙表出の推移

対象者14名の1歳から3歳の身振り、語彙理解、語彙表出をそれぞれひとりずつグラフにしたところ次の4つのタイプに分類することができた。

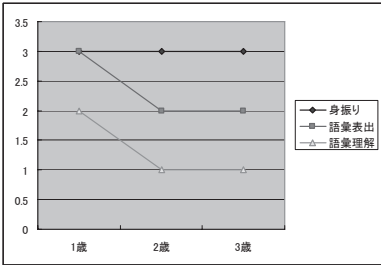
- グループ1：身振り高、語彙理解低タイプ
- グループ2：語彙理解高、身振り低タイプ
- グループ3：語彙理解高、身振り中、語彙表出低タイプ
- グループ4：3項目一致タイプ

各タイプの典型例を図2に示した。まず、グループ1はグラフ上で身振りの数値が一番高くどの年齢でも身振りが優先されている。また、この場合グループ1のほとんどは語彙理解が低くなっている。次にグループ2は語彙理解が高く、身振りが他2つの項目に対して低くなっている。グループ3は語彙理解高、身振り中、語彙表出低とどの年齢でも常に上から語彙理解、身振り、語彙表出の順になっている。そして、グループ4は

図2 身振りと言彙理解、語彙表出の推移

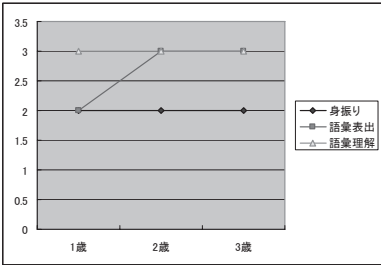
グループ1

身振り高、語彙理解低タイプ



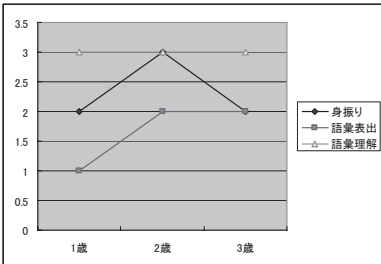
グループ2

語彙理解高、身振り低タイプ



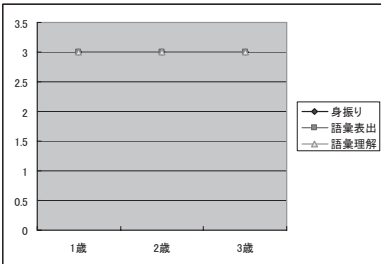
グループ3

語彙理解高、身振り中、語彙表出低タイプ



グループ4

3項目一致タイプ



どの年齢でも3項目すべてが一致またはそれに近い形で進んでいくタイプである。

## 5. 考察

### 5.1. 指さし頻度と語彙数の関係

指さし頻度と語彙数の関係について、Bates et al. (1979) は9～13ヶ月の子どもの縦断的研究で、指さしの頻度は数ヵ月後の単語の理解や表出の指標と正の相関があるとした。つまり、指さしの頻度が多いほど、数ヵ月後により多くの語彙を獲得しているとしている。また、指さしに限っての研究ではないが身振りはまだ獲得されていない語彙の代わりとして使われ、ある身振りに対応する語彙が獲得されたあとは、その身振りは使われなくなるという報告もある (Acredde & Goodwyn 1988)。本調査の結果、指さしの多さと語彙の多さには弱い相関を認めることができたが、有意差を認めることはできなかった。したがって、設定した仮説である「身振りの発現、特に指さしが多い子ほど語彙の習得も高い」を立証するには十分な結果ではなかった。しかし、前述の通り、本調査を行った時点ですでにある程度ことばによるコミュニケーションが可能な対象者は指さしに頼らずとも意思疎通が十分にできるため、指さしランクが低くなっている。得られた結果は、指さしの多さと語彙の多さに関して決して強い相関を認めるものではなかった。しかし、以上のことを考慮に入れば、指さしの頻度と語彙の数の間に相関が見られることから、指さしは初期の語彙の獲得において重要な役割を担っていると考えられる。

また、語彙ランクが男児より女児の方が高く、有意差が認められた結果については、男児と女児の月齢の有意差は認められなかったもので、純粹に性差によるものと考えられる。このような結果が出たことについて遊びの側面から考えてみると、男児と女児では頻繁にする遊びの種類が異なっていることに気づく。男児に多い遊びは、戦いごっこやブロック、どろんこ遊びが多いのに対し、女児では人形遊びやごっこ遊びが多い。戦いごっこやブロック、どろんこ遊びに比べ、人形遊びやごっこ遊びは遊びの中に用いる身振りが多い。たとえば、人形へのふりや大人が日常生活でするしぐさのまね、代置などである。そして、この遊びを進めていくためにはおのずとことばが必要になってくる。そのため、これらの遊びをよくする女児の方が比較的獲得している語彙が多いと考えられる。

## 5.2. 身振りと言彙理解、語彙表出の関係

本調査では、身振り、語彙理解、語彙表出の3項目のうち、2項目のうち一方の点数が高ければ、もう一方の点数も高くなり、反対に一方の点数が低ければもう一方の点数も低くなるという結果から身振りの頻度と言彙理解、語彙表出は互いに関連しているということがわかった。特に、身振りの得点が高い（身振りの頻度が多い）子どもはそのほとんどが語彙理解、語彙表出の得点が高く、このことから身振りと言語が互いに結びあって発達していくことがわかる。さらに、この特徴は2歳のときに顕著に観察することができることから、身振りが関係する言語の発達は2歳のときにピークを迎えるのではないかと推測することができる。

身振り、語彙理解、語彙表出の関係について、小椋（1999）は身振りは語彙表出より語彙理解との関係の方がより強いとしている。しかし、本調査の結果は必ずしもその指摘に当てはまるものではなかった。なぜなら、図2の1歳から3歳までの身振り、語彙理解、語彙表出の推移をみると、1歳から3歳までの身振りのレベルが高いと言彙理解は低いレベルに位置する傾向があるからである。この傾向は主にグループ1に見ることができる。反対に語彙理解が1歳から3歳を通じて高いレベルにあると、身振りが比較的低いレベルである傾向が認められる。このことから、一概に身振りと言彙理解がより強い関係にあるとは言えない。また、身振りと言彙表出の推移に注目してみると、身振りが高いレベルにあると言彙表出のレベルも語彙理解に比べ高いレベルにある傾向がある。これは、身振りが伴う見立てあそびや人形あそびの際に語彙の表出が必要となるからであると考えられる。

## 5.3. 身振り・語彙理解・語彙表出のタイプの特徴

4.3.2.でまとめたようにグループ1～4は、それぞれ4つのタイプに対応する。そこで、いくつかのタイプについてその特徴を考察する。

まず、グループ1は身振り高、語彙理解低タイプである。このグループに属する対象者の特徴は持っている語彙数は非常に多いが、大人に指示されたことができないために語彙理解のレベルが低くなっていると考えられる。この原因として考えられるのは、観察から見ると遊びに集中しすぎる傾向がある点が挙げられる。次に、グループ2は語彙理解高、身振り低タイプである。このグループに属する対象者の特徴は自分を出せる場所とそうでない場所があり、語彙理解は非常に高いがその場所によって身振り、語彙表出の頻度が変化する。また、理解がとて高いため、遊びに自分なりの順序や計画を立

て遊ぶことができるのもこのグループに共通する。最後に、グループ4は3項目一致タイプである。このグループに属する対象者の特徴は他に影響されず、自分を持っているという点である。

#### 5.4. 他者との関わり

ここまで身振りの種類と言語発達における身振りの役割を述べてきたが、言語発達の途上である子どもたちが置かれている環境もその後の言語発達に大きな影響を与えるのではないかと考える。身振りは言語発達において重要な役割を有しているとすれば、身振りを表出させる状況は自ずと子どもの言語発達にとって必要不可欠であるからである。具体的に身振りを表出させる状況とは両親や友達など自分以外の他者との関わりがある環境である。なぜなら、身振りとは他者に向けた意図的で随意的なしぐさのみを指すからである。また、第2章 第3節でも述べたように人間は何かを指さすときその指し示すものをよく見つめる。このように指さしには必ず視線が伴い、これは自分がそのものをよく見たいという理由ではなく、指さしと視線によって他者に示したいという意図から行うのである。そして、子どもは1歳前後で指さしを理解し、使い始める。つまり、そこに伴う視線も理解していることになる。正高（2004）によれば他者の視線を理解し同一のものに注目し、そのものを共有する指さしという行動は非常に高度なものである。自閉児はこの行動が非常に困難で、決して知能そのものが低いわけではないのに、他者に対する興味がほとんどなく、他者と関わる機会が少ないため、ことばの発達に遅滞があることが多い。これは言語というものが単に知能が高いか低いかや、言語が持つ規則やそれを理解する能力、記憶する能力があるかないかということだけで発達するものではないことをあらわす。そして、言語が人と人が相互に関わりあい、コミュニケーション行動をするという人間の能力によって発達していくものであることのあらわれでもある。

#### 6. 結論

以上述べてきたように乳児や幼児の言語発達には身振りが密接に関係していると言える。第2章では身振りとは何かということを中心に身振りの種類、特に指さしの特徴について触れた。そして、ビデオ観察の結果と文献を用いて、指さしの出現から発話までのプロセスを述べた。この一連のプロセスを要約すると、まず初語獲得以前から子どもは身体を使って意思や要求を表すようになる。この時点では、「要求対象を他者に指し

示す」という点で、まだ身振りとはいえないが、その後身振りの前段階といえる原身振りが出現する。そして、発話と同期しない身振りが見られたあと、1語発話期、約1歳半頃に入ると発話と同期した身振りといえる行動が出現する。特に指さしが増え、指さしを通して対象物とその対象物に対応する単語を得るのである。また発話数（語彙数）と指さしの頻度が比例していることから語彙の獲得において指さしが重要な役割を担っていることがわかった。

第3章、第4章、第5章では、調査を中心に指さしと語彙数の関係、身振りと語彙理解、語彙表出の関係を見た。その結果、指さしの頻度と語彙数には弱い相関が認められ、また性別によっても語彙数に差があることがわかった。さらに、身振りと語彙理解、語彙表出は相互に関連しあい、1歳から3歳までの推移を見ると4つの発達タイプに分類することができた。最後に言語発達時期の他者との関わりに焦点を当て、言語発達時期に置かれる環境が身振りの現れにくい状況、たとえば他者との関わりやコミュニケーションが希薄などの環境であると言語発達に遅れが見られるという事例を挙げて言語発達における身振りの役割を考察した。以上より、言語が単に記憶力や言語の規則などを理解する能力だけで発達するものではなく、コミュニケーション行動という人間と人間が相互に関わりあう能力によって発達するものであり、そのため人と人が関わり合う環境においておのずと発現する必要不可欠な身振りは言語発達においても重要な役割を有していると考えられる。

## 7. 問題点と課題

今回の調査は目的を達成するために適切であったかを考えると、調査には多くの問題点と課題があることがわかった。そのため、分析の段階で準備不足を実感する結果となってしまった。まず、サンプル数の少なさによる結果の信頼性の問題や記録方法の問題、さらに、身振りについて、観察を続けるうちに一口に身振りといっても特に子どもの場合は多種多様であることが判明した。これらの身振りをそれぞれ区別し、分析する必要があるだろう。

本研究調査では上記の理由から、到底めざましい調査結果には至らなかった。さらに有効な調査を実施するためには、これらの問題点を視野に入れ取り組まねばならない。

## 参考文献

- Acredolo, L. and Goodwyn, S. (1988). Symbolic gesturing in normal infants. *Child Development*, 59(2), 450-466.
- Bates, E., Benigni, L., Bretherton, I., Camaioni, L. and Volterra, V. (1979). Cognition and communication from nine to thirteen months: Correlational finding. In Bates E. (ed.). *The emergence of symbols: Cognition and communication in infancy*, 69-140. New York: Academic Press
- Goldin-Meadow, Susan. (2005). *The Resilience of Language: What Gesture Creation in Deaf Children Can Tell us About How All Children Learn Language*. Psychology Press.
- Iverson, J. M. and Goldin-Meadow, Susan. (2005). Gesture paves the way for language development. *Psychological Science*, 16(5), 367-371.
- McNeill, David. (1992). *Hand and Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- 麻生武 (1992) 『身ぶりからことばへ：赤ちゃんにみる私たちに起源』 新曜社
- 小原たみ子 (1999) 『初期言語発達と認知発達の関係』 風間書房
- 喜多壮太郎 (2002) 『ジェスチャー：考えるからだ』 金子書房
- 斎藤洋典・喜多壮太郎 (編) (2002) 『ジェスチャー・行為・意味』 共立出版株式会社
- ゲーラン, ルロワ (荒木亨訳) (1992) 『身ぶりと言葉』
- 小林春美・佐々木正人 (編) (2008) 『新・子どもたちの言語獲得』 大修館書店
- 中島誠 (1996) 『子どもが育てることばと知能－健常児と障害児に共通な発達の過程』 アカデミア出版会
- 正高信男 (2004) 『子どもはことばをからだで覚える：メロディから意味の世界へ』 中公新書

## 謝辞

卒業論文の執筆にあたり終始熱心にご指導くださった大角翠先生、データ収集にご協力くださった橋場保育園の先生方及び園児の皆様、常に励ましてくれた家族に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

## ABSTRACT

This thesis discusses the relationship between language and gestures in the process of language acquisition. During the process, children often use gestures to communicate before they start using words. The question is whether these gestures merely precede language development or are basically tied to it. Firstly, I examine the roles of gesture and vocalization in



language acquisition to show that language develops through vocalization and body movement at the same time. When gestures made by children were analyzed, it was found that spontaneous gestures begin to appear together with speech by the end of the one-word period; during this same period, gestures that were seen earlier gradually decreased. Secondly, I examined the development of gestures, vocabulary production, and vocabulary comprehension observed among 14 children over a three-year period. Gestures were found to have more correlation with vocabulary production than with vocabulary comprehension. Thus using gestures is necessary for children to communicate, as they play an important role of enhancing language ability.